

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

【事業所概要（事業所記入）】			
事業所番号	3270500139		
法人名	社会福祉法人 放泉会		
事業所名	グループホーム さわらび		
所在地	大田市三瓶町池田1219		
自己評価作成日	令和4年12月15日	評価結果市町村受理日	令和5年3月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 コスモブレイン
所在地	島根県松江市上乃木7丁目9番16号
訪問調査日	令和5年2月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

家庭に近い環境の中で、なじみの関係を作り、精神的にも安定した生活を実現し、認知症の進行を穏やかにすることを目指している。

行事や外出を計画し、季節感や非日常的な生活の場を楽しんでもらうようにしている。

ご利用者のできることを見つけ、その人らしく自立した生活ができるよう支援してる。家族との連携を密にし、「安心感」を持って頂けるようにしている。

コロナ禍で難しいが、地域密着型施設として、地域との交流、関りを大切にして事業の理解を深めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

隣にあった同法人内の特老が移転して単独になり数年が経過している。単独になっても、元々地域との関わりが強く地域に根差した施設として存在感があったが、ここ数年はコロナ禍の為グループホーム独自での動きを余儀なくされている。

山間で自然豊かな場所に位置しているため外部との接触機会も限られ、面会制限の影響は感じられるが、外出等も工夫して継続できており、日々の活動への影響は比較的に少ないように見受けられる。

全体的な介護度も軽く、入居者全員が女性で一緒に歌を歌ったり物を作ったり、一人一人のできることを見つけ、それが続けられるような支援体制へと繋がっているように思える。開所当初から比較的介護度の軽い方を対象とし、落ちついた環境の中での安定した認知症ケアを目指しており、従来のグループホームらしさが感じられる。

歴史もあり予防事業等での地域貢献度も高い為、新型コロナウイルスの感染拡大が落ちついた時にはまた新たな関わりができるよう取り組んでいただきたい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業計画を作成し、その内容を皆で共有している。また、基本理念をいつも目に見えるところに掲示している。	目くばり、気くばり、心くばり、声くばりの4つを張りだり、意識共有できるようにしている。できるだけ職員の異動を少なくと考えられており、新たな職員もグループ内の異動の為理念の共有はできている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の文化祭に、手工芸品等を出品して活動の発表の場としている。	コロナ禍で地域の活動はほぼ停止状態だが、文化祭の代わりに作品展示のみが行われたり、グループホームで手作業で作ったちぎり絵などを出品したり、布マスク100枚に刺繍をして持ち帰ってもらったり関わりを続けている。	少しずつ地域との交流が持てるよう検討していただきたい。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年は地元の中学校との交流や職場体験を通して認知症について理解してもらっているが、近年コロナ禍のためできていない。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度開催し、事業のサービス状況等を報告し、推進委員より伺った意見は職員間で共有し、サービスの向上に努めている。	コロナ禍で2回は書面開催としたがその他は2ヶ月に1回関係者が集合して行っている。市の担当課、民生委員、地域の有識者に家族代表の参加がある。入居者の状況や行事、研修等の報告を行い意見を得ている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の一員として行政と連携をとっている。運営推進会議の一員として来所してもらい、助言を得ている。	担当課からは運営推進会議に毎回参加があり、市の現状等情報を得ることができている。入所の問い合わせを受けたり、認定調査での関わりがあり、いい関係が築けている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「見守るケア」に重点を置き、玄関にセンサー設置。チャイムが鳴れば、その都度確認し、外出希望者等あれば、付き添い散歩を行っている。	母体の特老と合同で3ヶ月に1回委員会を行っている。身体拘束をしないケアに向けての各部署での取り組みの報告があったり、実例を聞きホームでのケアに役立てている。日中玄関の施錠は行わず、外に出る場合も一緒に周辺を歩いている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者の選択、自由を制限しないケアに努めている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者に成年後見制度を利用している者がおり、弁護士来所にて一緒にその取り扱いなどについても指導を受けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	可能な限り事前に見学して頂き、十分に説明し同意を得た上で契約してもらっている。また必要に応じ説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書を事業所内に掲示し、法人独自の苦情対応の第3委員を任命設置している。運営推進会議の委員として家族に都合のつく度に参加してもらい意見を聞いている。	グループホームさわらび便りや個人的にも3か月に1回写真入りで日頃の様子を伝えている。希望される家族には行事の写真をメールで送ったりして意見を得ようとしている。介護相談員事業も受け入れている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	グループホーム会議、個別の面談にて意見を聞き取り、反映・改善している。	管理者は日頃から職員の意見が出やすくなるように配慮している。年に1回は個人面談を行っている。グループホームとしての取り組みや個人的なことまで幅広く意見を聞くよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	バースデイ休暇を設けている。また有給休暇の利用の推進、介護職員処遇改善加算手当を支給している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実態と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人採用職員については規定内の研修を受講している。現在は新型コロナウイルス感染防止のために法人内の勉強会は未実施。その為グループホーム会議を通して事例の勉強会実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度より大田市介護サービス事業者連絡協議会に入会している。必要に応じて市内の他事業所と連携・情報共有を図っていく。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人、家族共来所してもらい、グループホームで生活する上での不安や要望を聞き、説明、納得の上で入所して頂いている。情報は全職員で共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所に際して家族と話し合い、安心感が提供できるように努めている。担当の介護支援専門員や入所前に利用していたサービス事業所から情報を得ている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族や本人と情報を交換し、十分に意向を伺い対応できるように配慮している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「共に生きる」の基本方針の下、利用者と職員がお互いに協力し合い生活している。利用者と職員が一緒に台所に立ったり、また一緒に作業している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と密に連絡をとり、家族も介護者の一員として意識していただくよう、働きかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため、面会は玄関でビニール越しとなっている。	ビニール越しでの面会は続けているが、直接的にふれあうことは難しい状況。懐かしい場所として法人所有の古民家でみんなでお弁当を食べてひと時を過ごす取り組みを続けるなど、思い起こす時間を大切にしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	グループホームが一つの家族という観点の下、支援を行っている。利用者同士の関係を把握し、配席に配慮している。職員が利用者の媒介者となり、話題作りにも努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了しても、相談は可能であることをお伝えしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	出来る限り本人の意向、希望を尊重し、個々の生活歴や性格、得意なこと等を把握し、精神的、身体的にも安定した生活が送れるよう支援している。	得意なこと、できることを続けるようにしており、キーボードを弾いたり、歌を歌ったり、毎日の食事作りに参加したり活動的な方が多いが、思いを伝えにくい方もあり、家族関係者から聞きながら計画作成に繋げている。	より充実した個別援助計画の作成に取り組んでいただきたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所に際して、本人、家族、担当介護支援専門員、入所前まで利用していたサービス事業所、主治医より情報収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	定期的なモニタリングの際、「いま出来ること、出来ていたこと」を把握するように留意している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	常に本人の希望や要望を尊重し、また職員の気づきをケアプランに取り入れるようにしている。利用者の状態に応じて、その都度モニタリングを行い、必要に応じてケアプランを変更している。	入居者が休んでいる昼食後の時間に家族に来てもらい担当者会議を行っている。遠方の方は電話で意見を聞き計画作成している。モニタリングを3か月に1回記入しており、現状に合わせたプランになるよう話し合っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日個別記録を作成し、職員間での申し送り、連絡ノートを活用し、情報を共有し統一したケアに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	下肢機能低下に伴い、数機種の歩行器の提案や、コロナ禍で外出が難しい今日でも四季折々の自然を堪能してもらえるドライブをする事で気分転換を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	新型コロナウイルス感染症蔓延以前は地域のサロンに参加していた。今日は山間地に事業所があることをプラスに受け止め、四季を感じる事の出来るメニューを取り入れるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時に意向を聞いている。定期的(2週間に1回)にかかりつけ医の往診がある。歯科、精神科の協力体制がある。	今までのかかりつけ医を続けることも、施設の協力医に変更することもできるが、法人の協力病院には入院設備があり、緊急時の対応も可能なため、家族の安心に繋がっており全員が往診可能な協力医に変更している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人施設の看護師の協力を得て、夜間、早朝、緊急時に適切な看護を受けられる体制がある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院に向けて家族を中心に担当医、看護師、リハビリ担当医、医療連携室との連携をとり、円滑な退院ができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りケアは行っていないが、やむを得ず退所の場合も、同法人内に特養があるので、状態の変化に合わせてスムーズな移動ができていますので、家族関係者の安心に繋がっている。	グループホームも母体となる法人も同じ協力病院で、同法人内には特老を含めて多くのサービスがある為、全体で看取りまで支援できる体制が整っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人施設の看護師の協力の下、吸引、酸素吸入等の研修を開いた。心肺蘇生研修についてはコロナ禍のため未実施。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急連絡網を整備している。また町内の消防団にも協力依頼をし、緊急時に対応についても話し合っている。消火訓練の実施。	近くの特老が移転しグループホーム単独になったため、地元の消防団の訓練時に建物内部を見てもらい今後の支援をお願いしている。数年前には大きな地震も経験しており、土砂災害危険地域でもある為、意識を高めて定期の訓練を続けている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	処遇、接遇について、職員の意識統一を図り徹底し、質の向上に努めている。	言葉使いや声掛け等気になる場面がある時や、方言の地域性により入居者同士の会話も含めて、きつく感じることもある為、お互い注意し合うようにしている。接遇等も研修で意識を新たにしているようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に寄り添い、自己表現ができるように対応している。日々の活動も自己決定してもらっている。月1回常会を開き、自由に意見が言える雰囲気づくりをしたり、希望があれば対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各々の状態やその日の状況を見ながら、その人の希望を尊重しながら支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人の意見を尊重している。理美容院の希望を聞いて、実施している。入浴時の着替え等、衣類を選んでもらっている。支援が必要な利用者には職員が助言している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者職員共に準備をし、職員も同じ食事を摂り談笑している。食器洗い等出来る利用者には順番でお願いしている。誕生日にはその人の好きなメニューを提供したり、季節感を味わってもらえるようにしている。	地産地消をモットーに調理に関わることを楽しみにしている。入居者と職員でメニューを決め食事作りをしている。新鮮な魚介を楽しめる日やおせちや餅つきなどの行事食を作り、みんなで作り、みんな一緒に食事を楽しめるようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分量を把握し、摂取量の少ない利用者には個別に促している。糖尿病等疾患のある利用者には食事量や飲み物等配慮している。バランスの取れた献立になるよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを促している。義歯は毎晩預かり、週2回は洗浄液に浸けている。法人内の施設で行われる口腔ケア研修の資料を見せてもらっている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各々の排泄パターンを把握し、随時トイレ誘導している。	車いすの方はトイレで定期誘導したり、パット交換の必要な方や夜だけ紙パンツの方、自立の方も多く、個々に合わせた対応としている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量を毎日把握し、出来るだけ必要量を飲んでもらうようにしている。適度な運動の勧めや排便チェック表を利用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本1日おきに入浴実施している。一人ずつゆったりくつろいでもらっている。月に1回隣のラヂウム鉱泉の温泉浴を楽しんでもらっている。	少し大きめの家庭浴槽で車いすの方もシャワーキャリーを利用して全員浴槽に入ることができている。1日おきの午前中に入っており、嫌いな方もなく朝風呂を楽しむ声もあり、職員と1対1でゆっくりした時間となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調をみて、随時休息してもらっている。外出後は休息をとってもらっている。日中の活動性を高め、午睡が長くならないように配慮し、夜間の良眠を妨げないようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ医の下、職員が管理している。薬は毎日職員複数で確認し、服薬介助している。処方箋はいつでも確認できるよう専用ファイルに閉じている。薬の変更があれば職員間で連携し管理している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々に合った役割(食器洗い、掃除等)や得意とする作業や取り組みを実施している。作成した作品を居室や廊下に飾ったり、文化祭に展示してもらい、楽しみや生きがいになっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため外出も難しくなっているが、時々ドライブや散歩に出かけて、気分転換をしている。	コロナ禍の為外出の際も大勢の方と触れ合うような場所には行かず、ドライブでも車からあまり降りないようにして出かけている。近くの古民家で一時を過ごしたり、施設周辺を散歩したり、できるだけ外気に触れ気分転換になるようにしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入所時に、本人、家族と意向を聞き、決定している。今は皆家族管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙やはがきの代読、電話の取次ぎ等を行っている。グループホーム便り(年4回)やメール(写真付き)で日々の様子をお知らせしてる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感をとりいれる採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースは季節感のある展示を行い、季節感を感じてもらえるように工夫している。テレビの音量や職員の声のトーンなど状況に応じて配慮している。家庭に近い環境を目指し、本人の時間を大切にしている。	デイルームの畳の部屋には炬燵を出してくつろいでいたが、上がり下りがしにくくなり炬燵はやめている。部屋に季節に合わせたちぎり絵等の作品を貼ったり、廊下の壁にも手作りのタペストリー等の多くの作品が目を引き。木目調でこじんまりと落ち着いた雰囲気が感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースでの団らん、中庭は洗濯物干しや取り込みに利用。夏はプランターで野菜の栽培や収穫を楽しんでいる。ホール入り口にも団らんスペースがある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に家族の写真を飾ったり、本人の希望でテレビを観ている。茶碗や湯のみ等使い慣れた物を使用している。	畳の部屋が4つあるが全員ベッドを使用している。収納スペースがあり大きめの物は入れられる。テレビや使い慣れたタンス、衣装ケース等が置かれており、家族親族等の写真もありくつろげるよう部屋作りをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーで移動しやすくなっている。トイレ、浴室、廊下には手すりを設置し安全に移動できるようにしている。トイレには光センサーで自動点灯設置、玄関にはスロープがある。		